

# 自信と誇り持ち誘客を

日本を訪れる外国人旅行者を増やそう

金沢で全国経済同友会セミナー



外国人旅行者の意図を誘致する第3分科会。金沢市内のホテルで開かれた。

16日開幕した第28回全国経済同友会セミナーでは、金沢市の石川県立音楽堂、ANAクラウンプラザホテル金沢、ホテル日航金沢を会場に、4分科会で活発な議論が交わされた。第3分科会では、「ふるさと愛が、地域の魅力や伝統文化などの財産を磨く原動力となる」との指摘や、「地元文化が好きだ」という気持ちが、地域の魅力を発信する強い力になる」との声が聞かれた。

【1面に本記】

## 「地元が好き」に強い力

4分科会で討論

### 第3分科会

安宅建樹金沢経済同友会

代表幹事（北國銀行頭取）

が議長を務め、「日本を世界に発信する」「外国人旅行者の受け入れ環境の活性化の切り札にもなり得る」と述べた。誘客の武器の一例として、ユネスコの

「地域の財産に磨きを掛ける」の三つの論点で意見交換した。

安宅氏は「国際観光は日本経済の持続的な成長に寄与する可能性を持ち、地域活性化の切り札にもなり得る」と述べた。誘客の武器の一例として、ユネスコの

世界無形文化遺産に登録された和食を挙げ、「当地では加賀料理の伝統があり、料理人の質が高く、器も多彩でレベルは高い」と、自信と誇りを持って誘客に努めることが大事だと指摘した。

前文化庁長官の近藤誠一、近藤文化・外交研究所代表は「外国人に日本に来てもらうことが、言葉やメールで伝えるよりはるかに発信力がある」と語り、一例として海外の芸術家が地域に長期滞在して作品制作する

「アーティスト・イン・レジデンス」を提案した。海外に地域の魅力を伝える上で最も大切なのは「地元文化が好きで誇りを持つこと」と、「伝えたい」という気持ちだと指摘し、「地域の魅力を知らなければ、たとえ言葉や文法が正しくても、相手に伝わらない」とも述べた。

文化庁文化芸術創造都市振興室長の佐々木雅幸同氏は「世界で今、最も注目されている都市論が『創造都市』だ」と指摘した上で、2020年の東京五輪に向け、全国で20万の文化プログラムを展開し、世界から5万人の芸術家を招く計画があることを紹介した。

外国人観光客の受け入れ環境について、東良和沖繩経済同友会副代表幹事（沖縄ツーリスト会長）は、体験を交えながら「地域の安全安心、快適さが一番大事だ」との見解を示した。その上で、東氏は「金沢には質の高い文化が息づいており、大人数の格安ツアーより、ある程度豪華な旅を楽しむ環境が整っている」と指摘した。

## 地方の力で日本再生を

前文化庁長官で近藤文化・外交研究所代表の近藤誠一氏は「21世紀日本の再生、世界への貢献と地方の役割」と題して基調講演した。近藤氏は「文化や芸術など地方が持つ力を発揮すれば、日本は再生し、世界をリードする国になる」と述べた。

近藤氏は「西洋発でつくった自由民主主義の『リベラル・デモクラシー』が今、行き詰まっている。我々は大きな変革の渦の中にいる」との見方を示した。

### 近藤誠一氏（前文化庁長官）が基調講演

その上で、日本人は自然を大事にし、西洋人のように何でも白黒で割り切らずに「あいまいさを受容する心」を持つと指摘した。目に見えないものを大切にすることがあると語り、「リベラル・デモクラシーをうまく使いこなすには、日本人が大事にしてきた精神が役立つ」と持論を展開した。

さらに近藤氏は、国境、国家は人為的につくられたものだが、都市は自然の集まりでできた人間の集合体だとし、「グローバル化が進む中で、（住民）一人一人は生まれ育った都市、地域にアイデンティティを持つ」と話し、地域に根ざした歴史や文化を大切にすべきだと強調した。家庭や職場以外で安らげる場として「サード・プレイス」を持つ重要性も説いた。

平成27年4月17日（金）  
北國新聞